

〔研究ノート〕

新約聖書研究覚書

土岐 健治

以下は、福音書を中心とする新約聖書と当時のユダヤ教との関係に関する、より包括的な文献学的研究のための準備作業の一端である。

一

マタイ及びルカ福音書におけるイエス誕生物語

マタイ福音書におけるイエスの誕生伝説がモーセのそれを手本にし、モーセの誕生伝説にあわせる形で、形成されていることは、これまでも指摘されてきた。中でも、旧約聖書偽典の一つである「偽フィロン」の「聖書古代誌」(Liber Antiquitatum Biblicarum) (伝承本文はラテン語)の中に見出されるモーセ誕生伝説は、新約聖書のイエス誕生物語伝承との密接な関連をうかがわせる、きわめて注目すべき伝承内容を伝えていたが、これまで十分に顧みられずに評価されてきているとはいえない。そこで、これを、

やはり同時代の注目すべきモーセの誕生伝説を伝えていたヨセフ著『ユダヤ古代誌』の伝承内容と共に取り上げ、検討することとしたい。

「聖書古代誌」は、天地創造からサウル王の死に至るまでを、旧約聖書に基づいて、その内容を要約しつつ同時に拡大敷衍したものである。その年代を紀元後一世紀とする点において、諸家の見解はおおむね一致している。ラテン語本文は、セム語原本のギリシア語訳に基づくものと思われ、原本のセム語としてはヘブル語説が有力である。成立地は、パルステイナ(エルサレムに限定する者もいる)と考えられている。「聖書古代誌」は第九章において、旧約聖書の出エジプト記(以下「出」と略記)の一章と二章の初めの部分を敷衍している。それによると、エジプト王の命令(出一22)をうけて、エジプト人は、ヘブル人から生まれる男児をすべて殺害し、女兒は生かして奴隷たちの妻にすることを決める(一節。以下節数のみの表示は「聖書古代誌」九章の節数を示す)。これをうけて、ヘブル人は集会を開き、子供を造らないようにすることを申し合わせようとするが、モーセの父「アムラム(Amram)」は、創世記一五13の神の約束に基づいてイスラエルの苦難からの解放の近いことを信じて (ut (Deus) liberet nos de humilitatione nostra)、「子供を造ることを宣言する(六節)。神はこれをめでて、やがてアムラムから生まれる子供を通して「驚く

べき業」(mirabilia)を行なうであろう、と語る(神の独り言のようである)(七、八節)。他の人々もアムラムの言葉を受入れてこれに同調する。

さて、アムラムにはアロン(男)とマリア(女)(Mariaはヘブル語のミリアムにあたる。出一五二〇―二一参照)という二人の子供があったが、「ある夜のこと、神の霊がマリアに降り(spiritus Dei incidit in Mariam)」、彼女は夢を見、翌朝、彼女は(夢の内容を)両親に告げた。『私は昨夜(夢を)見ました。すなわち、亜麻布を着た一人の男が(私の傍らに)立って、私に次のように言いました。「行って、お前の両親に伝えなさい。『見よ、お前たちから生まれるものは、水の中へ投げ込まれるであろうが、同じようにして彼を通して水が干上るであろう。私は彼を通して、さまざまなしし(signa)を行ない、我が民を救うであろう(salvabo populum meum)。彼は常に(民を)指導し続けるであろう』(ipse ducatum eius aget semper)』。マリアは(このように)彼女の見た夢の内容を語ったが、彼女の両親は彼女のことを信じなかった」(九、一〇節)。

他方、ヨセフス『ユダヤ古代誌』II 205以下は、ほぼ出一五以下に対応する部分に、次のような記事を伝えている。エジプトの *lepoynkhatetis* ― 予言能力を持つ ― の一人が、エジプト王に次のように予言する。「この時代に、イスラエル人の中に一人の人物が生まれ、成長して、エジプ

ト人の統治を危うくし (*tanneusei hen tnu Agyptian hyeoulan*)、イスラエル人の力を強め (*aisheoi de tois Iapanhtas*)、徳において万人を凌駕し、永遠の栄光を獲得するであろう」。この後、旧約聖書に沿った物語が続いた後、モーセの父アムラムが登場する。名家の出で、敬神の念あつい彼は、自民族の絶滅を恐れ、とりわけ妻の胎内にあるものの運命を恐れて、神に祈る。神は彼の祈りに応えて、彼の夢枕に現われ (*efhorateu kara tou imour atrou*)、彼を励まして、次のように語る。あの、予言されている子供というのはお前の子供であり、「彼は(ヘブル人を)滅ぼそうとして目を光らせている者たちの目を逃れて、不思議な仕方で育てられ、エジプト人から強いられている苦難からヘブル民族を救い出す(解放する)であろう (*to hen Eboalan yevos tis nap Agyptiois dudynis arohtoi*) …」(215f)。

紀元後一世紀にユダヤ教団において流布していた可能性のあるモーセ誕生伝説はこのほかに幾つか伝えられているが、それを伝える文献の年代と、その内容の両面から、新約聖書との関連で注目し、取り上げるに値するのは、右の二つである。冒頭に記したように、マタイによるイエス誕生伝説がモーセ誕生物語の型にあてはめて作られていることは既に認められ指摘されているが、両者の並行関係は厳密に検討されているとは言い難い。さらに、右の内容

紹介から明らかなように、ユダヤ教のモーセ誕生伝説は、マタイのみではなく、ルカによるイエス誕生伝説にも、影響を与えていると思われる。細かい検討は別稿に委ねざるを得ないが、ここでは重要と思われる二点のみを指摘しておきたい。

第一は、「聖書古代誌」でもヨセフスでも、やがて生まれるモーセが、その民を救うであろう、と言われている点である。これは、マタイ一21の「彼は、その民を、その罪から、救うであろう」と極めて近い。

第二は、いずれにおいても、神格が夢の中に（ないし、睡眠中に）現われて語りかけており、確かに、この点はルカにはなくマタイにのみ認められる特徴であるが、女性、それもまさしく「マリア」に「神の霊が降る」という「聖書古代誌」の内容は、ルカに近く、「マリア」という名前すらモーセ伝説から取られたのではないかと推測をも可能にする。ここでは、イエス誕生物語伝承がイエス伝承としては最も新しい層に属すると考えられていること、マタイとルカ以前には、マリアというイエスの母の名前はマルコ六3にしか現われないことを、指摘するにとどめておく。

二

洗礼者ヨハネはナジル人か？

ルカ福音書一章15節に、洗礼者ヨハネの誕生を予言しつ

つ、「彼は葡萄酒と *olkepa* を決して飲まないであろう」と記されている。*olkepa* は、口語訳では「濃い酒」、新共同訳では「強い酒」と訳されているが、このギリシア語はアラム語「シクラー」あるいはヘブル語「シェーカー」の音写であって、このセム語は葡萄酒以外の「弱い酒」、特に「ビール」を指す。もっとも、この「ビール」は保存用に濃縮されたようなので、その場合は確かに「濃い酒」かもしれないが、実際に飲む場合には水で薄めるのである。

それはさておき、ルカ七33でも、ヨハネが葡萄酒を飲まなかったとされている（もっとも、そこでは、「パンも食べなかった」とある。マルコ一6「いなごと野蜜を食べていた」と、マタイ一18「食べも飲みもしない」をも参照）。ルカ一15は、従来、ヨハネをナジル人として描いている可能性のある箇所である、と考えられてきた。たとえば、『旧約新約聖書大辞典』（一九八九年、教文館）の「ナジル人」の項は、ルカの二箇所を挙げて、「パプテスマのヨハネはナジル人のカリスマの特徴を帯びている」と記している。最近の註解書では、ルカ一15は、必ずしもヨハネがナジル人であることを示しているのではなく、彼の禁欲的生活、ないしは預言者となることを示しているのではないかと、とするものが目につくが、その場合も、歯切れが悪く、明確な証拠を挙げて論じたものは見当たらない。ルカ自身、一章76節や二〇章6節で、一貫してヨハネを「預言者」として

いるので(もっとも、七26はイエスにヨハネを「預言者以上のもの」と呼ばせているが)、それらに照らして一15も預言者のことを言っているのだと言えなくはないが、それだけでは根拠として弱い。筆者は、同時代のユダヤ教伝承を援用することによって、ルカ一15はヨハネをナジル人として描いているのではないことを明確にしたい。

先ず最初に、主に『旧約新約聖書大辞典』によって、旧約聖書を中心とする古代資料によるナジル人の規定を要約すると、次のようになる。①頭髪を切らない(ないし剃刀をあてない)こと、②葡萄酒を含めて葡萄からとれたもの(ないし、それから造られたもの)、それと「シェーカー」を、口に入れないこと、③死体(肉親も含めて)に近づかないこと(つまり、けがれを身に受けないために)。よく知られている士師記一三章のサムソンの例では、ナジル人たるべき男児の受胎告知と共に母親(サムソンではなくて)に対して右記②の禁忌が命ぜられ、生まれたサムソン自身は「頭に剃刀をあてない」(一六17)。

我々の箇所にとってはサムエルの場合が特に重要であり、注目される。というのは、ルカ一二章の伝える洗礼者ヨハネとイエスの誕生物語は、サムエル記上一、二章の伝えるサムエルの誕生物語に多くを負っていることが、認められているのである。

サムエルについて、サムエル記上一章11節(MT II Mas-

soretic Text)は、サムエルの母親となるハンナが、もしも男児が授かれれば、「頭に剃刀をあてない」と神に誓った、と記すのみで、その他の禁忌については全く触れず、「ナジル人」ということばもMTには見当たらない。これに対して、クムラン出土のサムエル記上のヘブル語写本(4QSam^a)には、一章22節に対応する部分で、「彼は、「生涯を」通じてナジル人となる」ということばが認められる。このように、サムエル記上一章11節の「頭に剃刀をあてない」というやや特殊な誓いにより、古来、サムエルをナジル人の一人とみなす伝承があったことがうかがわれる。

ところが、七十人訳聖書(以下 LXX と略記)は、サムエル記上一章11節の MT に対して、*kai ónov kai jisevra ou nleval* (そして、葡萄酒とアルコール飲料を飲まない)と付け加えている。さらに、右記のクムラン・サムエル記(ヘブル語写本(4QSam^a))もこれと同義の付加を伝えている。ヨセフスの『ユダヤ古代誌』V巻では、サムエル記上一章11節に対応する三四節で、ハンナが「サムエルの生活様式は一般の人々とは異なるものとする」ことを神に誓い、続いて、男児サムエル誕生後、ハンナは「あの誓い(祈り)を忘れることなく」サムエルを「預言者とすべく神に捧げ、祭司エリに引渡した。そこで、かれの髪は(剃刀をあてられることなく)のび、彼の飲物は水であった」。ちなみに、ヨセフスは、サムソンもサムエルも「ナジル人」と

も「士師 (*קטרת*)」とも呼ばず、一貫して「預言者 (*נבואה*)」と呼んでゐる。

さらにこれらに加えて、「偽フィロン」の「聖書古代誌」は、興味深く注目すべきサムエル誕生物語を伝えている。それによれば、ハンナは男児を求め祈りの中で、剃刀にもアルコール飲料(含葡萄酒)にも言及せず(以降の物語の中でもこれらの禁忌は全く言及されない)、彼女の祈りが成就することを約束する祭司エリは、彼女には告げないが実は彼女から生まれる男児が「預言者」(*propheta*)となるべく定められていることを知っている。男児誕生から二年後に(MTでは、乳離れしてから)、サムエルをエリに渡してからハンナが歌う賛美の祈り(サムエル記上二章1-10節に対応)の中で、サムエルは「預言者」と言われる。人々は歓喜の音楽と踊りの内に(*cum tympanis et choris, cyneris et nablis*)シロの聖所へやって来ると、「サムエルをエリに差し出し、そして彼(サムエル)を主(なる神)の前に立たせて、油を注ぎ(*unxerunt eum*)、『預言者が民衆の中で生き続けるように、そして、この民にとって長く光となるように』と語った。(ちなみに、「聖書古代誌」は、サムソンに関する部分でも、「ナジル人」ということばを使わず、ナジル人の禁忌にも全く言及しない)。

最後に、「タルグム・ヨナタン」は、サムエル記上一章から二章11節までを敷衍的に訳した部分において、「剃刀」へ

の言及を削除し、「アルコール不飲」にも言及することなく、二章のハンナによる賛美の祈りの中で、サムエルを「預言者」と呼んでゐる。「タルグム・ヨナタン」の年代は明確でなく、紀元後一世紀より遅い可能性が高いが、その伝承内容については紀元後一世紀には流布していた可能性が高い。

以上の検討より、まず最初に、サムエル誕生物語において、サムエルが「頭に剃刀をあてなかつた」のみでなく「アルコールも飲まなかつた」とする点において、セプテュアギンタとクムラン聖書写本とヨセフスは一致していることが明らかとなる。つまり、「アルコール不飲」という点において、ルカ福音書一章15節は、これらのサムエル誕生物語伝承と全く一致していることになる。他と比べて異なるのは、「聖書古代誌」と「タルグム・ヨナタン」が「剃刀」にも「アルコール」にも言及しないことと、ルカが「アルコール」にのみ言及することであるが、「剃刀」に言及しない点においてルカは、「聖書古代誌」及び「タルグム・ヨナタン」と一致している。そして、これらのユダヤ教伝承が、サムエル誕生物語において、クムラン聖書写本以外は、一貫してサムエルを預言者と呼んでいることが注目される。以上を総合すると、サムエル記上(MT)のみならず、否それよりはむしろ、同時代の様々なサムエル誕生物語伝承のより大きな影響の下に形成されたと考えられるルカのヨ

ハネ誕生伝説の中で、一章15節の「葡萄酒と *olxepa* を決して飲まない」という一句は、洗礼者ヨハネを「預言者サムエル」に結びつける以外の何の役割も持っておらず、これをナジル人に関連づけることの正当性は極めて低いと言ふべきであり（クムラン聖書写本の伝えるヘブル語聖書本文伝承が、ヨハネ誕生伝説形成に影響を与えた可能性を認めるのでなければ）、これに比べて「預言者サムエル」の禁欲的生活をも強調しようとしている可能性は（「アルコール不飲」に言及しない他の伝承に比して）多少は認め得るかもしれない。

三

本稿を通じて、従来顧みられることの少なかつた「聖書

古代誌」の重要性を、いささかなりとも明らかにすることができた。民衆がサムエルに「油を注いだ」という記述は、ルカー―二章においてはヨハネとイエスの誕生物語が渾然一体となつて伝えられていること、サムエル誕生伝説はイエスの誕生物語にも影響を与えていること、を考えると、一層注目すべきである。様々な意味において新約聖書の背景を成すユダヤ教の解明のために「聖書古代誌」の果たすべき役割は、今後の重要な研究課題である。なお、本稿は、極めて短時日にまとめねばならなかつたので、本文中の古代文献への言及を除いて、文献指示及び註記は一切省略した。

(一橋大学教授)